

(論 文)

日本統治末期の京城舞鶴公立高等女学校の校長と 内鮮一体の実態

新 井 淑 子

キーワード

京城舞鶴公立高等女学校 内鮮一体の教育 学友制 学徒戦時体制
家庭演習

はじめに

高等女学校研究会（以下高女研と略記）では、植民地朝鮮（朝鮮は当時の用語を使用）の高等女学校（以下高女と略記）の資料蒐集や卒業生へのアンケートやインタビュー調査、韓国の高女関係学校史や鄭世華（「韓国近代女性教育」梨花女子大学校女性史編纂委員会編『韓国女性史Ⅱ』）の著書や論文等を翻訳し「戦前の女子中等教育の研究 No.6～10」を1999年から公表した。高女研のメンバーである山本禮子（会代表）、福田須美子、太田孝子が著書や論文等で梨花・龍谷・釜山・淑明・進明等の高女の設立過程、校長、教員、教育内容、生徒の抗日運動、師弟関係、高女の教育が自己実現にどう関わったか等を明らかにしてきた。

筆者が高女研の研究対象である「京城舞鶴公立高等女学校」（以下舞鶴高女と略記）は、朝鮮人主体の京畿高等女学校（1908年創立、1938年度より同名称、以下京畿高女と略記）に次ぐ朝鮮人生徒が多い公立高女であるが、未研究である。京畿高女は太田孝子「植民地下朝鮮における京畿高等女学校（上）」（『岐阜大学留学生センター紀要』2002年）や同著『海峽を越えて 京畿高等女学校の思い出』（春風社、2008年）等がある。また、1944年同校卒の羅英均は『日帝時代、わが家は』（みすず書房、2003年）を出版している。太田は論文で上記内容等を解明し、著書でインタビュー調査（上記高女研メンバー）を中心に、同校の植民地教育の特徴と師弟交流や韓国の学術・文化等諸活動を展開しつつ自己実現したことを公刊した。その一人である羅英均は、前掲著書で創氏改名時の親等の苦悩、皇国民鍊成等の教育を批判し、他方反戦的な教師や友人関係等高女時代が、その後の自己実現の底流にあることを指摘している。

舞鶴高女は、現在舞鶴女子高等学校となり『舞鶴五十年史』『舞鶴六十年史』（2000年）『舞鶴七十年史』等出版し、同校及び同窓会は創立60周年記念式典に日本人教師と卒業生等を招待し、当時の在校生に「名誉卒業証書」を贈呈している。同校の関係者は京畿高女同様に現在も個別に日韓交流を深めている¹。そこで太平洋戦争開始、中等学校令で朝鮮語は随

あらい よしこ：淑徳大学 国際コミュニケーション学部 人間環境学科 教授

意科となり皇民化教育がより強化される時期、朝鮮総督府の「内鮮一体」の開校目的を「具現化」「可視化」する女子教育、日本語即ち国語の普及を、初代校長長谷山利市はどのように捉え実践をしたのか、同校の教育や生徒の実態、その後の生き方等を解明するのが本研究の目的である。なお、本論では高女研の前掲学校史やアンケート調査等と筆者が実施した聞き書きの一部を交え、同校の開校前後から1943年秋位までの初代校長を中心に取り組みの実態と同校の特徴を明らかにしたい。

1. 京城舞鶴公立高等女学校の開設前後

(1) 女子中等学校の入学難の状況

舞鶴高女は、日本統治末期の1940年3月30日に朝鮮総督府告示352号により朝鮮総督府により設立され「内鮮一体、国体明徴、忍苦鍛錬の具体化、可視化、実体化を目的」²とした新設校である。同校は女子中等教育入学難の緩和策の設置であるが、その状況から見たい。

1934年～37年度の高女の入学率は、公立高女（29校）の平均が、ほぼ日本人が70%、朝鮮人が30%前後である。37年度の私立高女（1校）は25.39%（日本人26.64%、朝鮮人13.43%）である。朝鮮人の公立女子高等普通学校（11校、以下女高普と略記、38年度より高女）の入学率は、34年度54.84%から37年度38.16%と低下する。私立女高普（10校）も34年度の25.79%が、36・37年度は13.27%、14.00%となる。なお私立女高普の入学定員は34年度の1407名をピークに36・37年度は1250名と減少したことで、入学難が加速される。

37～40年度の高女の学校数と生徒数とそれらの増加率は表1である。学校と生徒数をみると、37年度は日本人主体の高女生中朝鮮人は5%である。38年度から女高普が高女となり新設もあり、37年度を1とすると39年度の学校数は37年度の1.9倍の57校と急増し、生徒数も1.87倍となったが、日本人の生徒数は37年度の95%から57.2%となり、舞鶴高女開校の40年度は54%になる。朝鮮人は既述の高女に移行後の39年度は、生徒総数の42.8%から40年度は46%を占めた³。しかし朝鮮の人口比率（日本人2%）で見ると朝鮮人の入学難は厳しく、39年3月の「梨花女学校」は「入学難十一対一」⁴という状況である。なお、同年12月には高女の新設や学級増が望めないなら、高女の「父兄側」が「経費」負担で「学級増」を、と総督府学務課に要望している。その背後には40年度の「高女の入学試験が公私立一斉実施」（京城40年2月28日実施）にむけ、公私立1校受験は万一の時高女に行けないため、公立高女の入学定員増を確保しておく必要に迫られたのである⁵。

親の教育要求に応えるために、総督府学務課では入学難解消を講じ39年3月に「内鮮人共学実施 新設中等学校6校新設」⁶を決め、翌40年1月には「新設は16校、学級増加廿校」を地域別新設と既存学校への学級増を発表した。そのうち高女は4学校新設7学級増となる。その1校が「京城」の「新設高女」と明記⁷された。舞鶴高女の設立は日本人と朝鮮人の教育要求に、朝鮮総督府が中等学校への入学難解消に応えるための緩和策であったのである。

2

表1. 1937～40年度の朝鮮高等女学校数・生徒数内訳

年 度	学校数 (増加率)	生徒総数 (増加率)	日本人生徒数 (総数の割合) (増加率)	朝鮮人生徒数 (総数の割合) (増加率)
1937	30 (1.00)	11,924 (1.00)	11,338 (95.0%) (1.00)	586 (5.0%) (1.00)
1939	57 (1.90)	22,277 (1.87)	12,742 (57.2%) (1.12)	9,535 (42.8%) (16.24)
1940	64 (2.13)	24,550 (2.06)	13,266 (54.0%) (1.17)	11,284 (46.0%) (19.22)

しかしそれらは焼け石に水であり、舞鶴高女が開校した3ヵ月後の40年7月には、京城府立「京城第一、京城第二、女子実業」の3校の入学率が「四十九%」と落ち込み、日本人救済の「第三高女の設立調査」を開始⁸し、京城府に翌41年4月に京城第三公立高女（以下第三高女と略記）を開校した。因みに同校の生徒は168（日本人157、朝鮮人11）名であり、日本人の教育要求に応えた措置である。また、同年の朝鮮人生徒は、5年制の京城府立の京城第一高女が1092名中7名、京城第二高女も1070名中4名である⁹。

以上からも朝鮮人の公立高女への入学は困難を極めた。それ故日本人と朝鮮人の教育要求に応える「内鮮一体」の4年制の公立舞鶴高女の開校は、特に朝鮮人に注目されたのである。

（2）舞鶴高女の開校

1940年3月6日、1940年度の中等学校の京畿府内の中学校と高女・仁川府内に職業学校3校の新設は、「内鮮一体」の教育を実施すると朝鮮総督府学務課は公表した。同時に「入学者選抜計画発表」と開校等の日程も公開した。そのうち高女は「募集人員」「150名」、「入学願書」は「3月10日」に「京畿道学務課」で交付、「出願」は「3月20日」、「入学者選抜考査」は「3月25日」、受験場所は「鐘路公立小学校」、「合格者発表」は「3月末日」、開校は「4月中旬」¹⁰である、と。同年3月12日には、京城府内の高女の新設は「舞鶴町」¹¹と決定し、その名称は「舞鶴高女」と決定した。なお正式な高女名は京城舞鶴公立高等女学校である。

京畿府内の中学校と高女は、中等教育への教育要求を反映し朝鮮人の入学希望者が特に多く、新設の「内鮮共学折半選抜方針」の舞鶴高女と旭丘中学校（新設校名）の受験者が多く「入学競争尤甚予想」され「朝鮮人児童」の応募者が特に多い「空前」の「受難相現出」した¹²。

舞鶴高女が設立告示された3週間後の1940年「4月20日」には、鐘路公立「小学校の一部」を借用し「募集人員」より10名も多く入学者は「160名」である。なお同校の応募者は「千四十一名」（日本225、朝鮮816）であり、「空前」の「受難相現出」¹³した。後述の卒業生が、同校に入学を「誇りに思う」要因の一つであろう。舞鶴高女は翌1941年、現「ソウルサンドン区ヘンダン2洞322番地」に新築し移転した。新校舎の周辺は日本人の果樹園や「セリ」畑があり、冬は凍ったセリ畑がスケート場となり、氷の下にはセリの新芽がみえた。その周辺は「1941年3月25日総督府告示第337号」の「京城都市計画」で「地域一帯が風致保存地域」¹⁴となり、恵まれた環境である。同校の生徒の家庭や入学の動機を見ていきたい。

2. 高女生の家庭と入学の動機

朝鮮の親達が高女を選ぶ基準は「大体保守的な家庭は京畿女高、淑明女高などに通わせて、開化した家庭では梨花、培花、清真女高などについて、比較的現代化された家庭では舞鶴」³高女であった、という。「現代化された家庭」とは、親の再婚相手が日本人で日本語で生活している家庭や親が「日本人と交流」している家庭等をあげている。「現代化された家庭」で育った生徒が、戦後の新しい学校で朝鮮語に苦慮し画家になった卒業生もいたほどである¹⁵。

父親の職業をみると12名中官吏5、公務員2、会社員2、銀行員1、卸業1名（無記載1名）である。家族構成は、三世代等の大家族が2名で、他は核家族である。兄弟姉妹は4～5名が各4名、他は2名や6名、7名が各1名である。使用人がいたのは10家族である

が、6名を使用中が1名、他は1～2名であった。

舞鶴高女への入学の動機は、24名の回答者中「高女への進学を当然」(13名)と思う経済的に恵まれた生徒が半数強である。そのうち父や家族、親族の勧めが6名、教員の勧めは5名(含親にも1名)である。「現代化された」親や京城の親族が教育理念に共鳴して舞鶴高女を勧めていた。その上に明確な進路の目標をもって受験した生徒がいる。主体性のある卒業生は、「京城女子医専」にいく、京城府外の在住者が「知識を習って社会奉仕すると共に女性として賢くなりたいため」に舞鶴高女を選び、それらが実現した卒業生たちがいる¹⁶。

教員は「舞鶴高女は特別学校ですから、名門校でも一番良い学校だから行くように」、と勧めている。また舞鶴高女の教育理念が「国民的関心の中で名門」のため「全国(朝鮮)から多くの学生」が応募した前述の「朝鮮日報」の予想通り「入学倍率も高かった」¹⁷ので千人を越えた応募者の中から舞鶴高女に入学できたことは「大変な誇り」¹⁸であった、という。なかには舞鶴高女の教員(農業・理科)が、親に入学を勧誘した例がある。第4期入学の日本人は、母親が知人の教師に直接勧誘されて同校を選択している¹⁹。

なかには京畿高女に「数学の点数」が不安で舞鶴高女を選んだ卒業生もいる²⁰。

3. 教員、教職員と生徒数

(1) 教職員数と生徒数

1940年度の開校以来1943年度まで教職員と生徒数を見ると、生徒数は学年進行と共に入学者は3学級増となり生徒数は増加する。しかし、教職員は高女発足時の12名は、表2の通り1941年度は生徒数160名から151名増となり合計311名となったが教職員は、発足時より1名減の11名である。それが1942年度は順調に3学級増となり生徒数も前年度より166名増の477名となり、教職員も7名増の18名となる。高女の1～4年生まで揃った完成年度の翌1943年度は、生徒数は643名となり、生徒数は前年度より166名増であるが、教職員は前年度より1名増の19名である。

舞鶴高女の入学者は、日本人と朝鮮人をほぼ同数選考したのが特徴である。具体的な教員数や生徒数は、下記の表2の通りである。

表2. 京城舞鶴高等女学校の学級・教員数・生徒数

年度	学校数	職 員 数					生 徒 数							
		計	内男	内女	朝男	朝女	総数	内	朝	入学	退学			
1940	3	12	10	1	1	0	160	79	81	内80 朝80	内2 朝3	内1 (死亡)		
1941	6	11	8	1	1	1	311	154	157	1学年	2学年			
										内79 朝81	内75 朝76			
1942	9	18	10	5	1	2	477	240	237	1学年	2学年	3学年		
										内82 朝81	内83 朝81	内75 朝75		
1943	12	19 2	9	7	1	2	643	320	323	1学年	2学年	3学年	4学年	
										内86 朝85	内79 朝84	内85 朝84	内70 朝70	

高等女学校研究会『高等女学校資料集成 第17巻』大空社 1990年 612頁 616～617頁 634～635頁 650～651頁より作成した。しかし、1940年度の表中の記述では『舞鶴60年史』と池田照子の2009年11月21日の証言によると教員と事務職（内地、朝鮮各1）は10名であったと言うが、朝鮮総督府学務局『昭和十五年年度編纂（昭和十五年五月末現在）朝鮮諸学校一覧』（昭和十六年四月発行）の119～120頁、渡部 学・阿部 洋編『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮篇）第61巻』龍溪書舎 1988年の復刻版でも「表2」の通りのためそれを表記した。なお池田によると死亡者は朝鮮の生徒であり、校長は校内に墓をつくった。表中の略記「内」は「内地人」、「朝」は「朝鮮人」、「職」は、「教職員」のことである。

（2）発足時の教職員

舞鶴高女の開校時の12名の教職員は、長谷山校長と各教科が1名の教員と事務職2名である。教員は日本人と朝鮮人の金杉（金煥泰、英語）である。国語は河野（朝鮮のソンリン商業）、柴田は、広島大学卒の新採用で歴史担当、理科は木下、「体育」の稲留は九州から赴任、音楽の岡田行雄、家事の上田照子（現池田）、事務長の沼田と若い朝鮮人の男性であった²¹。

開校時唯一の女教員上田照子（1945年7月退職・現池田）は、日本の金城専門学校卒業と同時に、中等学校家事・裁縫の試験検定を受け8月の合格発表直後、金城専門学校から理科の助手兼同附属高女の教諭に採用された。翌40年に母校の京城第二高女の家事の教員が、上田を舞鶴高女に「推薦」したため、日本から朝鮮に戻り同校教員となっている²²。上田は長谷山「校長がものすごく情熱家」で「赤い顔」をして「心から学校を愛し、学校が育つための意欲に燃えていた」という。上田も同校の創立理念である「内鮮一体の達成を目標に誠心誠意責任をもって指導にあたり」「緊張の連続の日々」を送っていた²³。

金杉（金煥泰）は、同志社大学から九州帝国大学英文科卒業の英語の教員であった。金杉は「高等文官試験」をめざし、常に「法典書を抱えて」いたが「穏やかな顔」をしていた。しかし英語が随意科となり、同校は廃止したので1943年度で舞鶴高女を退職したのである²⁴。

（3）1941年以降採用の女教師

その後の日本人の教員は小松崎、山根（礼儀作法）、三好（長刀）²⁵である。長谷山校長時代は京畿高女の教え子を採用した²⁶。1941年12月の繰上げ卒業と同時に採用され国語を担当した國友美子（鄭在仁）や「ガライシ先生」も奈良女子高等師範学校卒である。「ガライシ先生」は、1943年度の1年生の担任で「数少ない韓国人先生の中の一人」であったが、「妊娠脚気」で死亡している。1943年の入学生は「赤ん坊を背負って出勤したペブ先生」が「居眠りしながら裁縫を教えていた」²⁷。中等学校令以降同校の既婚の女教員は、学校での諸訓練や食料難等が相俟って、妊娠や出産育児と仕事の両立が厳しく一命を削る痛ましい勤務であった。後の海軍奉仕隊等により長谷山は、平南道視学官に1944年4月転勤²⁸となると国友は、同年12月に母校の京畿高女に転勤し「地理、国語」を担当している²⁹。

その後犬山校長になった1944年4月³⁰、茂山戸妍（孫戸妍）が家事科で採用された。東京府生まれで京城府の進明高女から帝国女子専門学校家事科（1943年12月卒、現相模女子大学）に留学中に枅富照子や佐佐木信綱に師事して和歌を詠み、44年5月には佐佐木信綱の序文入り『戸妍歌集』を出版した茂田³¹を、担任の生徒は「普通の女の先生に見えた」³²、と。

卒業生たちは長谷川利市校長を「印象深く、徹底的な愛国者」で「熱心な教育精神」をもっていた、と。そのことが「極右的な教育方針は無作法も多かったのか、後任の犬丸校長は

知的で洗練された方に見え、心から尊敬」³³したと对象的な校長観が述べられている。

長谷山が内鮮一体型の学校教育の理念をどう捉え具体化しようとしたのか、以下でみたい。

4. 舞鶴高女の長谷山利市校長の教育方針

舞鶴高女の初代校長長谷山利市は、広島文理大学出身で京城府内の京畿高女の教頭であったが、舞鶴高女の新設に伴い校長に抜擢されたのである³⁴。長谷山の専門は国語である。朝鮮における国語（以下全て日本語による教育をいう）の普及を見据えた女子教育の必要性を長谷山は実践躬行していた。それらを以下の座談会での参加者や本人の発言を中心に見ていきたい。

1942年7月6日、『文教の朝鮮』誌の主催で朝鮮総督府30周年に「国語普及状況が人口の一割五分」の問題を「研究」「調査」して普及を促進する目的で、「朝鮮における国語問題を語る」座談会を開催した。当日の出席は長谷山を含め13名（近藤・時枝・斉藤京城帝大教授、岡本法律専門学校教授、八幡第二放送部長、高橋教学官、島田編纂課長、森田・富山・広瀬編修官、市村視学官、石本調査官）である。

（1）長谷山利市校長の教育方針—国語教育と女子教育—

女子教育が「国語常用」には必要である。母親が国語を常用しないとその成果は覚束ない。そこで舞鶴高女の式典に参加した総督府学務局広瀬編修官は、その取り組みを披露した。「長谷山先生の（式）に生徒（が）『私は毎日お母さんに国語を教えます。そのお母さんが私と一緒に国語だけで話せるやうになったらどんなにうれしいでせう』。…（国語を）婦人層に向けることが必要」、と。時枝は「そのことが余り考えられてゐない…（かと）思ひます」、と。学校での国語普及は、女子教育が「国語を常用させる近道」（高橋）であり、「母親に国語を習得させる方面を強調」（時枝）する実践が緊急の課題である、という認識で一致してきた。そこで長谷山は舞鶴高女の女子教育の実践は、将来母親の家庭での国語常用につなげる展望をもった国語普及活動と一体の運動である、と強固な信念の基に以下のように述べている。

「今の女の子がお母さんになって…赤坊に教える…時になると国語が名実ともに朝鮮の国語になると考えてを。だから…生徒達…徹頭徹尾国語を使わす…、それが二百人でも三百人でも…家庭に入った時…真に国語を以て当たるやうになる…。これが私の運動の根本です」と。

（2）生活国語と中等学校の国語の分離

市村視学官は、国民学校では「国語と生活」が一体の教育であるが、中等学校の国語教育も「専門的な国文学的なものでなしに、飽く迄生活と結びつけて考えて行く、左様な点は、更に言えば皇国臣民といふものを一層生活に浸潤されて、それらが一体になって行く。これが国語普及の根本的な理念でなければならぬ」、と。この視学官の発言に反旗を翻したのが長谷山である。長谷山の教育理念とその具現化、即ち生活国語の実践を根拠に以下の通り述べている。

「今、市村さんのお話に付いて、はっきりしたい…、教科書にある中古文を省いて、生活国語をやる…或は中古文は扱うが国語の修辭語に於て生活語自体を錬磨して行くといふ心遣

ひにしなければならぬといふこと、個々は重大問題と思ふ、教科書を生活国語の所謂諸言葉に引き下げてしまったならば、日本の伝統を有つてをる言語に依る文化は或いは精神的な高さも遂に伝えることが出来ないと思ふ。…北支や南洋…に日本語を普及するのと、朝鮮で国語をやるのと非常に違ふ…、教科書自体は厳然として、今の教科書として保持されなければならぬ、只修辭語に於て、生徒の生活語を錬成して行く、その国語の心遣ひが足りなかつたことは、我々国語教師としては反省せねばならぬ。もう一つ…は、…国語問題は国語教師の生活国語、もっと言ふならば、国語教科書を容認して取扱う上に…生活国語が錬成させて行く物だといふ一般の人の誤りもある…。あれ自体生活語はどうにもならんと極端に言へる。自分…は、学校の生活国語は、例へば朝来て晩帰る迄一切の授業の際或は作業の際に於いて、少なくとも学校でバラ撒く、そして総ての所謂必要に発する言葉を、私は学校の生活語と申してをりますが、それに対して全職員、全生徒がこれにおつかつて行く…のですが、私の学校の国語常会の国語授業は、授業として動かすべからざる理念を有つてをるが、我々は明確な、完全な生活国語は出来ないの、生活国語の錬成は別途に、学校で導かなければならぬといふ立場が、国語常会を案出した根本理念です。そして『言葉拾ひ』『言葉躰け』『言葉擴め』の三つの部門を統括して、生活国語として別途に学校一致一丸となつて当たつて行く、そうでなければ到底駄目だ。そこに一般人誤解というか、分つて貰いたい部面があると思ひます。

なお、長谷山の発言に「同感」の岡本法学専門学校教授は、「教室での国語」と「実際の社会生活上の国語」は、「矢張り幾分別途に考える余地がある」と「生活の方の国語」は「型が決まつてをる」「尊敬」や「謙讓」語等の「特殊なものだけ自由に伝えるようにすれば出来る」、その指導は「中等学校の国語教員のみ（では）…出来ない。それには特殊な時間を取る」か、「学校全体の先生がそういう風に指導して行けば出来る」と述べたのである。まさに舞鶴高女の国語教育は、教職員が一丸となつて学校教育全般で「学校の生活語」を意図して「生活国語の錬成」「国語常会」の実践が岡本により支持されたのである³⁵。

(3) 長谷山の国語の実践—「天皇」に「帰一」

1943年の舞鶴高女の「国語常会」では、「毎月二十日（1時間）」に「全校生徒」を対象に「正しい国語を正しく上手に」を目標に「生徒の生活環境から雑多な素材を收拾して之を検討し且つ戦ふ学徒として時局即応の問題を捉えて、これを発表せしめ話し方の修練に資すると共に家庭竝に近隣への国語普及をねらつてゐる」。教師が指導し「四年の連盟文化部幹事」が「司会し発表」しているが、それを「漸次に全校生徒」に「進めている」。

「家庭修練」では「戦時下家庭の推進隊員」として「国語生活の普及徹底」等がある。前掲生徒の母親への国語普及の作文は、家庭の日常生活が「国語生活の普及徹底」の実践の場である。今後は「休業期間」も実施し「所定形式」に「報告」させる。それを「学業成績勸励案の資料」とするほど「家庭の推進隊員」³⁶の任務は、国語普及の一翼を担っていた。

これらの国語論と実践が注目されたのか長谷山は、前掲座談会の翌1944年に「半島女子の国語の躰」を執筆している。国語教育は皇国民として「天皇」に「帰一すべきもの」と前述の座談会の市村視学官の発言を、かみ砕き皇国民の錬成へと導くのである。長谷山は言う。

国語は日本の言葉だ。天皇陛下のお使い…尊いお言葉。…有難くも勿体ない言葉…。決して一語も粗末にしてはならない。…国語を真にわが身につける…ことは、結局己のすべてを虚うして、ただただ天皇陛下に仕へ奉る清明の赤き心に帰一すべきもの…信ずる」³⁷と。

5. 「内鮮一体」の具現化、可視化

(1) 学友制

舞鶴高女は「内鮮一体」「国体明徴」「忍苦鍛錬」を高女教育で具現化し可視化し実態化する使命がある。同校の入学者は、入学当日教員が決めた日本人と朝鮮人の生徒各1名ずつ2人が1組となり、行動を共にする「学友」と称し、それが学校生活の基礎組織とした「学友制」を導入した。「学友制」は、特に特別活動（「遠足、野外活動、娯楽」）では学年が違っても「妹学友、姉さん学友」と称し、助け合い等しながら行動を共にしたのである。

「学友制」は生徒定員150名ならば1学級50名を25組、1学年3学級なので75組作る。学年進行と共に組は増加し、1期生が4年生になる43年度には、学校全体で320組つくられた。遠足も1年～4年生が各組の8名を単位に行動する。この方法は43年以来同校では、軍事関連団体行動等に至るまで「学友制」を基本に取り入れ、後述のような諸組織にも一貫して活用した³⁸のが特徴である。その方法は1944年度まで継続し、45年度からは相性を考慮している。

後任の2代目校長犬丸勝良（1944年4月に着任）は、「内鮮一体」の建学精神は継承しその方法は教育的配慮か、1945年度の入学生は同校の2名担任制を活かし生徒の相性等を3ヶ月間観察後の選抜と変更して、7月7日に学友結成式を挙行し犬山カラーを発揮した。保護者宛には同日付けで「内鮮学友制度」の理解と協力とその推進の一翼を担うことを期待し、相手の学友や保護者名、職業、本籍や住所を知らせている。保護者には学友制度を「内鮮一対の深化徹底」と位置づけ、その「順調なる成長」は「学校の指導と生徒相互の自覚…保護者各位の御理會と心温き御援助」で「完璧」と「確信仕り候」「相手方の生徒及び家庭…相互に充分なる認識…漸次厚誼を深め…本制度の趣旨を具現致される様篤と御力添へ願度」と文面を送付した。高女では学友の対面式を7月7日に実施したのである³⁹。

(2) 校長官舎で「日本式生活化」の宿泊体験

1943年5月から11月頃まで長谷山校長は、「内鮮一体」の高女教育の総仕上げと位置づけ校長官舎で宿泊体験する「日本式生活化」の「家庭演習」を4年生に課したのである。その方法は、土曜日の放課後に1組の学友が校長官舎に来て宿泊して、日曜日に他の学友が訪問し校長夫妻と上田と4名で昼食を共にして、月曜日の朝そこから舞鶴高女に登校する日本式の生活体験をさせた。日本人は学友が着物がない時は2人分持参して、校長官舎で着物に着替えて食事の支度やその作法等からはじまり丸2日間、日本式の生活様式の「全て」を体験学習した。校長夫妻と上田教諭と2組の学友4名全てが着物を着て正座して食事の「家庭演習」の写真がある。指導者は家事科担当の上田照子である。上田自身は土曜や日曜日自宅から「40分位」かけて校長官舎に出勤して、生徒達に「食事に関する」作法、お風呂に生徒と一緒に「入浴の仕方」等を教えた。朝鮮の生徒は日本の「住居の構造等凡て違い温突（オンドル）」で生活しているので畳の部屋での「寝具」やその使い方、寝具での就寝の仕方「休み方」等を指導して生徒たちが床に入り「おやすみなさい」と挨拶して、上田は「日本式生活化」の「凡て」を教え帰宅したのである。

上田は家庭演習の実施後生徒には感想を直接聞いていない。しかし、朝鮮の生徒は「学友として入学以来つきあって大抵のことは理解していても、最後の仕上げ」の「家庭演習」を「納得して応じ、楽しい気持ちで応じていた、そんな雰囲気」があった、と述べている。また、朝鮮の生徒には日本式の生活が「何もかもはじめての経験になった」という思いはある、

と。上田は、第1期生の家庭演習の指導を「高女創立以来の担当者でしたから私は…当然…
 と思ひ」「独身で時間の制約もなくただひたすら一生懸命」に生徒たちのためにと思つて教
 えた、と。⁴⁰卒業生は「土曜午後に校長先生宅に泊り…日曜日に…昼食をする…日本の生活
 様式を体験…学習を続けて下さった。なかなかできることではないと思つた。お茶やお花…
 もあつた」と⁴¹。

この家庭演習は、1944年11月の「鎮海の事件」(次稿)に時間をとられ終焉したのである。

6. 学徒戦時動員体制の取り組みの実態

(1) 「高等女学校修練教授要目案」

1943年6月、中等学校令により高女の「学徒戦時動員体制」の強化を目的に朝鮮総督府
 は「高等女学校修練教授要目案」を公表し、高女の「修練指導要目案」で指導要旨、方針、
 指導事項等、教育理念と実践内容を明示した。その「指導要旨」は、「修練は行的修練を中
 心として教育を実践的に総合的發展せしめ教科と併せ一体として尽忠報国の精神を發揚し獻
 身奉公の実践力を涵養すべし」と。「指導方針」の5項目は「皇国の道を躬行実践せしめ尽
 忠報国の精神を發揚すべし。学行一体、心身一如の積ましめ創造的実践的性格を育成すべし。
 師弟同行学友相互の砥励切磋を重んずべし。礼節を尚び規律を重んじ学校一体の精神に徹せ
 しむべし。特技特能を伸長せしめ自発研究の精神を涵養すべし」と。修練も「日常」(除教
 科)、「毎週定時」(年間100~160、1・2年は週3、3・4年は週3~5時間)、「学年中随
 時」(各学年凡30日)に分け、その全てに「研修」「鍛錬」「作業」の目的や内容、実践事
 項を詳細に提示し、末尾に「事例を斟酌し適切なる修練課程を定めて行ふべし」と各高女の
 主体性も付記していた⁴²。

(2) 舞鶴高女の取り組み

学徒戦時動員体制の目標は「没我の皇国民としての精神的」な修養・錬成・訓練を主眼と
 し日常的・定期的、随時の修練、登下校に至るまで、形式は高等女学校修練教授要目案を踏
 襲し活動内容には独自の取り組みが散見する。その体制は、高女と家庭の基礎的修練・訓練
 を「戦う学徒としての精神訓練、学徒の国防要員たるの訓練、学徒として生産拡大への協力
 訓練」の内容を「表3」に抽出した。なお附記「戦う学徒の学校家庭に於ける訓練」もある。

① 「戦う学徒としての精神訓練」

戦う学徒の精神訓練は「必勝日参、決戦常会、家庭修練、決戦年度への蹶起」の具体的な
 実践は「米英に対する宣戦」である。「戦う学徒の生活三則」の「指導目標」は「(一) 心身
 に一分のすきのない生活(心身無敵)(二) 出来ないと言うことのない生活(赤心奉行)(三)
 一切を大君に捧げて私のない生活(背私向公)」である。この精神で「朝鮮神社」に「神州
 不滅の信念」で「必勝祈願」の参拝を、「学友班8名(「学友」1~4年)で1942年12月8
 日より「年中」継続中なのが「必勝日参」である。「戦への力を…修練に活かす組織」は
 「決戦常会、学級常会、学校常会、国語常会」で、「常会心得」(「イ 和やかな気持ちで協力的
 に、ロ 真面目で健全な態度で ハ 自らを正して学校と御国の新しい力に)を唱える。

「決戦年(を)…勝ち抜く」「氣迫」も「各自は米英女学生二人を左右に引受け日々『い
 つも三人』で「対日反抗の本格化…神国必勝の信念と神拝、思想謀略戦の展開…不動の覚悟
 と思想戦士、決戦より血戦へ…血の氣魄と常在戦場」と心得「反省(と)…前身…真面目発

揮」で「学級常会」（各学級愛国班）「学校常会」もすべて「実践意欲」を「昂揚」させる。

②「学徒の国防要員たるの訓練」

「国防要員たるの訓練」は、「戦う学徒の体育訓練、学校総力隊の強化、国防訓練」がある。「御国に役立つ身体」作りが目的の「体育訓練」（「体錬常会、放課後錬成、競歩、教練」）は、「練習、体質、体格技量」と「学業性行優秀」者が「推進隊員」となり訓練の中心となる。「学校総力隊」は、高女を「一箇大隊…各大隊は二箇中隊、各中隊は三箇小隊」に分け「隊長は職員」で「行軍、勤勞作業、競歩等」を実施。「国防訓練部」と登下校「特設防衛団」、「防空警備補助員」や「救急看護…炊出し」と「勤勞報国部」もある。

表 3. 舞鶴高女の研修・訓練・作業等（含勤勞作業に一部）の期間とその内容

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 毎 日：①授業前「朝鮮神社」に「必勝祈願」の「参拝」、②放課後「每学期一回以上各学級対抗試合（陸上戦技排球等）と平素のそれらの修練等 2. 週 1 回の訓練：①「体錬常会」で「体操行進陸上戦技」（金曜日 6 時限）、②「学校農園の実習」
「一週一時間宛全校計 12 時間」 3. 月 1 回の訓練：①「学級常会」（大詔奉戴日（一時間））、②学校常会（毎月 10 日）、③国語常会
毎月 20 日）、④「一箇月一〜二回競歩行軍を実施」、⑤防衛団（「登校中」と「下
校後」別編成）定時 4. 每学期 1 回以上：各学級対抗の陸上戦技排球等試合（国防…）20 時間を数回 救護看護訓練 5. 10 日間：夏期勤勞作業（最後の 3 日間①合宿訓練を兼ねた作業） 6. 3 日間：合宿訓練（夏期勤勞作業の最後） 7. 随 時：①教練は「正課外」の「随時閱兵、分列行進等」、②国防団（「登校中」と「下校後」
の訓練、家政実習 8. 不定期：①「防空警備補助員の訓練」「三箇班（各班十五名）」編成で高女団長の命で「城東警
察長の隷下に属」す、②「一、夏期勤勞作業」の「十日間」 |
|---|

③「学徒として生産拡大への協力訓練」

「生産拡大への協力訓練」は、「学校農園の実習経営、校地の開墾増産、各家庭への奨励指導」である。1941～43年に実習地「二千坪」を「校内下肥…全部を…農場」に運び「三階段の平面地」に「改良整備」して、「学友」「職員」「共同」の区分を、43年「秋作より全部共同実習地」に変更して、師弟の協同作業とした。43年9月の収穫は「甘藷一万本、茄子二千本、白菜、大根」等を「各千坪栽培」した。「開墾増産は…一千坪開墾」。「夏期勤勞作業」は「ソバ」まき。「今冬は麦類…来春は豆類」の栽培予定。生徒は『勤勞は勤皇なり』（本校の誓い）と働く⁴³。生徒が家に野菜を持参するとお母さんがとても喜んでくれた⁴⁴。

10 「各家庭への奨励指導」は、「一坪園芸の普及」と「空地利用」に生徒が「日頃校内実習を通じて養われた勤勞と愛情の具現化」で「積極的協力」が「家庭から…喜ばれている」。

④「戦う学徒の学校家庭に於ける訓練」

附設の標記の訓練は、「夏期勤勞作業、勤勞の誓い、合宿訓練、家政実習」がある。10日間の「夏期勤勞作業」は、「学校一体御国のため」に「働きを捧げ得た」。規律ある「日課」の高女生たちは「三集団（各集団は約二十四学友班、人員約二百名）」に分かれている。各集

団では「始業禮（国旗掲揚、国民儀礼、鳥船運動、勤労の誓斉誦）」後「作業（軍袴下縫製、農場実習、開墾）」し、「終業禮（国旗降下、終末体操）」で終了する。夏の「午睡訓練（昼食後一時間）」後「軍袴下は500の縫製」と「約千坪」の「開墾」もした。「学友精神の強化徹底と師弟同行学校一体の実をあげる目的」の「合宿訓練」は「勤労作業最後の三日間」を学内で実施。5時半起床、6時の「朝礼」と21時の「夕礼」には、「正座、挨拶、人員報告、奉拝、敬禮」（順は一部異なる）があり、21時30分消灯と規則正しい生活である。

「家政実習」は、中等学校令の「決戦生活の確立」に応え「学習の実際化・生活化」を学ぶ「家政処理の実務的訓練」の場とする。同校は1943年5月から3年生と4年生を対象に、母親を指導者に「朝食」から「家事一切」を「処理」して「登校」する「家政実習」を開始した。それが「概ね予期の成果」をあげた。今後の課題はそれを「深化徹底を図り…戦時下の女子たる使命を完遂し得る皇国女性の錬成に資す」ために「随時訓練として夏季、冬季の休業」に記録をとらせる「訓練を全面的に拡充（し）…家政の運営」もさせたい⁴⁵。

しかし、決戦下の盛沢山の訓練作業等に従順に励む高女生ばかりではなかった。43年度入学生位から学校は「授業もろくにしないで奉仕ばかりで何の為の学校か」。「心ある朝鮮の生徒は制服の下に純白の民族衣装を着、敵機の襲来にその白い服を振って『自分は日本人ではない』ことを知らせる」という「流言さえ（教師が）耳にするよう」になった。教師達は「生徒達の動向にも気付かず空襲警報時の対策等に追われ（敵機の襲来は一度もない）」学校は戸惑いその懐柔策として蒸しパン」を配給した⁴⁶。

それを周囲の日朝の生徒達が互いに譲り合い毎日交代で1人家族分を持ち帰る、物資欠乏の折りそれを喜ぶ家族を見るのが嬉しかった、という1945年度の日本人入学生もいた⁴⁷。

おわりに

舞鶴高女は朝鮮総督府の「内鮮一体」の創設である。その背後には特に朝鮮人の劣悪な入学難がありその解消の緩和策が「内鮮一体」の日朝の「生徒折半」という形で可視化、具現化させたのである。そのため朝鮮人に歓迎され高倍率となり、入学者は「誇り」をもったことが判明した。長谷山はその政策を具体化するために情熱を傾け、創意工夫して「内鮮一体」の高女のあり方を「可視化」「具現化」するために、日朝の生徒が対になって日常的に行動する学友制度の創設、校長官舎での日本式生活化の総仕上げの「家庭演習」、学校と家庭での1坪農園や2千坪の実習園の開墾、栽培、親への生活国語の普及を实践したことが明らかになったが、同時にそれらが特徴でもある。また、勤労働員、軍事訓練、軍事作業等の「忍苦鍛錬」の「具現化」に欠かせない精神的な高揚は、皇国民として天皇への忠誠心を高女生に見合った分かり易い、覚えやすい標語的な滅私奉公を「勤労は勤皇なり」「だまってすべてに私なく働きます（献身）」など「勤労の誓ひ」を、作業や訓練前に全員で唱えさせている。

長谷山の高女教育では、「内鮮一体、国体明徴、忍苦鍛錬の具体化、可視化、実体化を目的」に学徒戦時動員体制の諸訓練や作業等の組織も学友制を基盤に確立し、規律ある学校生活は模範的な体育「推進隊員」や国語普及の「連盟文化部幹事」の生徒達を推進役に、農園等の作業を「学友と師弟同行」による日常生活を確立し時局の要請に応える取り組みである。

さらに他校同様に天皇の「御真影」を「校長室、教務室もちろん中央玄関と各教室」に掲げ皇国民の培養を願った。また毎日朝鮮神社に戦争必勝祈願の参拝や「皇国民の誓詞」を唱え皇民化教育を推進した。「正しい国語を正しく上手に」と「国語常会」や家庭への生活

国語の普及の一翼を担う、皇国女性の子育てを展望した「生活国語」の育成は、同校の特徴である。1944年に「島田総督府学務局編集課長」の主張と同様に、長谷山は学校教育の「国語＝天皇の言葉」と主張する。それは「植民地のなかの『国語』」の教育の行き着く先を示すと同時に、その教育のまったくの破綻を示す⁴⁸、という研究が公刊されている。

注

1. 2000年4月20日、開校60周年に「舞鶴女子高等学校長劉永粉」は1945年8月までの在校生に「名誉卒業証書」を授与した。小野幸子直井美智子氏提供。「友好の海峡半世紀ぶり『卒業』ソウルの女子高」東京新聞 2000年4月21日
2. 京城舞鶴女子高等学校同窓会 権裕善訳「舞鶴六十年史」高等女学校研究会プロジェクトチーム「一戦前の女子中等学校の研究－高等女学校に関する調査資料 No.9（韓国の女子中等学校関係）」2002年93～95頁、「内鮮一体、国体明徴、忍苦鍛錬」は、南総督の五大施政中にあるが、それを朝鮮教育の三綱領として、1937年に10月に制定し、「皇国臣民の誓詞」でその精神を「強化徹底」した。朝鮮総督府学務局学務課『朝鮮における教育革新の全貌』1938年 1～2頁
3. 朝鮮総督府学務局学務課『秘 昭和12年11月 学事参考資料』21～23頁 85頁 87頁 101頁
渡部学・阿部洋編『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮篇）』第59巻 同60巻
4. 「入学難十一対一 受験者殺到の梨花女学校」大阪朝日新聞 1939年3月14日 第20620号 坂本悠一
監修・編集 『大阪朝日新聞外地版 16 南鮮版、南鮮版B』ゆまに書房 2008年 69頁
5. 「新義州高女の学級増に邁進 父兄側で猛運動起す」1939年12月21日 第20900号 4に同じ18 西鮮版
版』314頁
6. 「新教育令に則り内鮮人共学実施 新設中等学校6校新設」1939年3月17日 第20623号 同上4に同じ
72頁
7. 「中等学校大增設」1940年1月24日 第20933号 同上4に同じ 同29 中鮮版 25頁
8. 「京城に第三高女 府で調査に乗り出す」1940年7月4日 第21094号 同上7に同じ 164頁
9. 朝鮮総督府学務課『昭和十六年度編纂（昭和十六年五月末現在）朝鮮諸学校一覧』1942年5月 129頁
10. 「京畿道内新設学校 入学者選抜計画発表」『朝鮮日報』1940年3月7日 第6767号
11. 「中学校は『旭丘』高女は『舞鶴』」1940年3月12日 第20981号 同上7に同じ 55頁
12. 「物凄い志願者 京畿道の新設の3中等学校へ殺到」7に同じ 1940年3月20日 第20992号 76頁
13. 同上94頁
14. 2に同じ
15. 2に同じ No.4（外地高等女学校分）1990年 18～19頁
16. 2に同じ No.6（韓国の女子高等普通学校・高等女学校の分）2002年 51頁
回答者24名は、以下2つの資料を加算している。高等女学校研究会プロジェクトチームでは、1989年に外地（朝鮮、台湾、関東州、樺太、満州、中国）の33の高等女学校の卒業生にアンケート調査を実施した。京城舞鶴公立高等女学校は1945年の卒業生20名にアンケート用紙を発送し12名から回答があった。174～181頁
17. 同上 50頁
18. 16に同じ 95頁
19. 市原陽子より2009年11月17日聞き書き
20. バク・ギチン許善子訳「卒業生追想『ああ、昔よ！』」舞鶴女子高等学校『舞鶴第41号』1996年
2に同じ No.7（韓国の女子中等教育関係、女性教育論文）2000年 33頁

21. 小坂康子・市原陽子より2009年11月17日聞き書き 池田照子より2009年11月20日聞き書き
22. 同上池田照子に同じ
23. 16に同じ 95～96頁
24. 16に同じ 32頁 46頁 44頁 95頁 金煥泰は退職後持病を治療したが1944年5月病没。文芸評論等が評価され、1986年全北ムジュ徳有国立公園に文学碑が建立。金煥泰の教え子呉春煥ら5人は文学碑の除幕式参加。
25. 21に同じ
26. 21に同じ 池田より聞き書き
27. 16に同じ 32頁 46頁 21に同じ 95頁
28. 長谷山利市（明治33年生）は、大正14年広島高師文化第一部、昭和8年同文理大学卒（『第十四版 大衆人事録 外地満・支海外篇』 81頁 芳賀登・杉本つとむ・森睦彦他篇『日本人物情報大系第75巻』皓星社 2001年7月）は、「昭和16年度朝鮮人名録』『朝鮮年鑑附録』京城日報社 88頁『日本人物情報大系75朝鮮編5』高麗書林 1940年10月発行 377頁では、京畿公立高女教諭であったが、1940年度は京城公立高等学校舞鶴高等女学校長（「昭和18年度 朝鮮人名録』京城日報社 117頁 高麗書林『日本人物情報大系75 朝鮮編5』高麗書林 昭和17年10月発行 467頁）、昭和19年度には平南道視学官（朝鮮年鑑編纂部編「昭和20年度 朝鮮人名録』『朝鮮年鑑 全13巻附録』403頁）になっていた。
29. 16に同じ 47頁
30. 犬丸勝良（1904年生）は、九州帝国大学卒業。『昭和16年度朝鮮人名録』と『昭和18年度同書』（芳賀登・杉本つとむ他編『日本人物情報大系第75巻』皓星社 2001年 339頁 416頁）では、18年度の10月1日現在では、1940年～1942年には忠清北道学務課長 犬丸は京城師範教頭（池田照子談）の期間は、1943年4月以降と推察される。
31. 北出 明『風雪の歌人 孫戸妍の半世紀』2001年4月 講談社出版サービスセンター、北出 明『争いなき国と国なれ 日韓を読んだ歌人孫戸妍の生涯』英治出版 2005年 「切実な願いが吾れにあり争いなき国と国なれ」
韓国政府より「花冠文化勲章」「日韓文化交流功労者」として表彰された。
32. 直井美智子より2009年12月26日聞き書き。孫戸妍が、突然父上が連行の苦勞と歌人（評価）を聞き手紙を出す。
33. 16に同じ 93頁 95頁
34. 28に同じ
35. 「朝鮮における国語問題を語る」『文教の朝鮮』1942年8月 第203号 21～36頁
36. 京城舞鶴公立高等女学校「学徒戦時動員体制の実際」『文教の朝鮮』1943年9月 214号 12～13頁
37. 安田敏朗『植民地のなかの「国語学」』三元社 1998年 242頁 193～194頁
38. 36に同じ 12～16頁
39. 小野幸子の提供資料 2009年12月28日聞き書き
40. 21の池田照子に同じ 2009年11月末日付 池田照子（旧姓上田）より筆者宛手紙
41. 16に同じ 93頁 95頁
42. 「高等女学校修練指導要目案」『文教の朝鮮』昭和18年6月 211号 40～42頁
43. 36に同じ 14～15頁
44. 32に同じ
45. 43に同じ
46. 40に同じ

日本統治末期の京城舞鶴公立高等女学校の校長と内鮮一体の実態

47. 32に同じ

48. 37に同じ

(受理 平成23年1月11日)